

あいめーる

AUTUMN

愛隣館通信

令和3年11月20日発行
発行
社会福祉法人 愛隣園
障害者支援施設 愛隣館
発行責任者 三浦貴子
編集 広報チーム
キャリアビジョン

〒861-0551
熊本県山鹿市津留 2022
TEL 0968-43-2771
FAX 0968-43-2793
http://aileans.com
E-mail
ailinkan@magma.jp



e スポーツ綱引きを体験中：食堂ステージにて

初めての体験が出来たことに深く感謝しています。

「eスポーツ」とはテレビゲームをスポーツ競技として捉える際の名称です。(株)ハッピーブレインの力添えで、障害者向けにコントローラー等を福祉用具等のスイッチに変換(改良)して競技を楽しみました。久しぶりに館内は湧き上がり歓声や笑い声、あふれんばかりの笑顔に囲まれました。



大ボタンや顎を使うことで機器を操作

コロナ禍における日中活動を模索している中、「A-life なんかん」がeスポーツの導入体験事業で参加施設を募っていると知り、この度応募。体験へと繋がりました。しかし、蔓延防止措置等で初回体験を何度も延期。施設側、事業者側双方のコロナウイルスワクチン接種が済み準備が整ったことでやっと開始(九月十一日から十月二十三日まで全八回)に踏み切りました。

最終回では、導入体験施設(県立総合体育館小学生、陽光学園、愛隣館)の三施設によるオンライン対抗戦全八試合が行われました。試合が進むに連れて互いの会場は熱気を帯び、ゲームにも慣れてきた最終戦は大熱戦。結果は三位と惨敗でしたが、盛り上がりは一位でした。絶えていた施設間交流の貴重な場となりました。

体験！eスポーツ

理学療法士 松永彩

愛隣館職員研修のひとつに、「共通の体験を通して、感じたことを共有する」取り組みがあります。今夏の東京パラリンピックを見て感じたことのミニレポート一〇〇本の中から一部を、さらに皆様と共有させて頂ければと存じます。三浦貴子

① 副施設長・田中裕一

オリパラが開催されたことを個人的には大変嬉しく思います。しかしながらコロナ禍において一年の開催延期や開催是非も問われる中、選手にとっては苦しい年間だったと拝察。大会が始まるとメダルラッシュで、卓球での大逆転勝利など感動的でした。今回のオリンピックでは大会に集中できる環境が整い、選手も観客も一体となって開催できることを願います。パラでは視覚障害の一五〇〇m走に感動しました。伴走者との息を合わせたランニングにはお互いの信頼関係の強さを感じました。きつと練習の時からお互いをライバル、またパートナーとして時間を共に過ごし、たくさんの努力をされたのだと思いました。「私は、これほどの思いをもつて障害者の方と正面から向き合い、目標に向かって取り組んでいるだろうか」と自分に問いかける機会となりました。

② 愛隣倶楽部・管理者・辻啓司

二〇一五年から「2020東京パラリンピック選手育成強化推進事業」の選考とマルチサポート委員会の委員長を務め、県出身選手を七年間サポートさせて頂いたことに感謝しております。今回の東京パラは、日本選手団の過去の結果から大きく飛躍した大会でした。これまで日本がなかなか勝てなかった個人競技の車椅子陸上短距離走での金メダル獲得と、団体競技では、入賞さえ無理とされていた車いすバスケットボールの男子において、前回優勝のアメリカチームを決勝

戦で最後まで追い詰めたことは、誰もが記憶に残る試合だったと思います。

ブラインドサッカーの黒田選手とは、彼が県立盲学校時代に陸上競技で広島身障団体に出場した時以来の友人で、彼にとって初めてのパラ出場、応援に力が入りました。車いすバスケット女子の平井選手、ウィルチエアーラグビーの乗松選手は、身障センター体育館でひとり黙々と練習に取り組む姿を見てきて、あの地道な日々の努力が報われたと思います。無観客開催、できれば大勢の観客の声援を受け、歓声の中で表彰台に立って欲しかったと思います。マスコミがオリパラを同格に取り上げて頂いた事で、パラリンピックの価値・魅力が伝わる大会だったと思います。これを基に選手にとって活動しやすい環境になることを願います。

③ 総務部・チーフ・梅崎美智子

「富田宇宙選手は知っていたほうがいいよ」パラリンピックについて語っていた時、何も知らない私に入居者のFさんが教えてくれました。早速ネットで調べて情報収集。熊本出身の水泳選手だと分かりました。また入居者のMさんは、「次の大会にボッチャで出場する！」と目を輝かせておられました。バスケの鳥海選手はすごかった。『最強』の国枝選手、全米オープンのご活躍をお祈りしております。

今回東京での開催に当たり私自身が知らないことばかりでもっと(テレビ)観戦すればよかったと反省しております。たくさんの夢と希望と感動を与えてくれたオリパラの選手の皆さんお疲れ様でした。

④ 生活サービス部・サービス管理責任者・古川和代

「失ったものを数えるな。残されたものを最大限生かせ」パラリンピックの父、グッドマン博士の言葉です。新しい生活を模索している、世界や私達とリンクする言葉です。視覚障害のパラリンピアンは、「コロナで不自由？僕は生まれてからずっと不自由だよ」と笑っ

たそうです。

感染症に振り回されて右往左往している自分が小さく思え、パラリンピアンが力強く生きてる事を感じました。

視覚障害陸上では、「ガイド」と呼ばれる伴走者が、「きずな」と呼ばれるロープでつながり、ランナーの力を全部出し切り、マイナスにしないように伴走します。コロナ禍では、伴走者も感染しないように他の人と会わないような生活を送ったそうです。私も、ランナー【利用者】とガイド【職員】の関係で、きずな【絆・心】で伴走【日々の支援】したいと思います。

国際パラリンピック委員会がキャンペーンをしている「We The 15」は、胸が熱くなりました。「世界中の人口の15%は何らかの障害がある。周りの人が、あたりまえの存在だと見るようになったとき、やつと壁は無くなる」

全てのパラリンピアン・スタッフ・ボランティアが、力強く美しく輝いて見えて、素敵だったパラリンピックでした。

⑤ 生活サービス部・生活支援員・清水誠一郎

障害を持つ人達、私は沢山の個性を持っている人達だと思えます。人は誰もうまれながらにして平等という権利を持っていることを、すべてのオリリンピアンから映像を通じて色々な事をもう一度見直す機会を頂きました。そしてひとつの疑問点。好成績を期待されている選手が予選で敗退すると起きる非難。人の気持ちへの配慮は、私達介助する側もされる側も常に持つべきだということも学びました。それぞれが思いやりを持ち、尊敬しあえる対人関係を築かなければいけないと思えました。誰しも、人はひとりでは生きて行けません。オリパラの選手は必ず感謝の気持ちを持っていました。

そして、一番印象強かった選手。エジプト代表卓球選手、イブラヒム・ハマドトウ選手。両腕を失い友人からの心無い言葉にも屈せず、不屈の精神でオリリンピ

ック選手になり、「人間に不可能はない」と言われていました。

努力することに健常者も障害者も無いと思います。

⑥ 生活サービズ部・生活支援員・吉川雄介

パラリンピックを見ての感想は、何と書いても杉村英孝選手が出場しているボッチャというスポーツです。僕は愛隣館に入って初めてボッチャという競技を知りました。今回のパラリンピックでボッチャという競技がいかに繊細で頭を使うスポーツなのかと分かりました。決勝で杉村選手が五・〇で勝利し金メダルを獲得されたところを見たら、障がいとか関係なく凄くかっこいい選手だなと思いました。これからもパラリンピックが盛り上がると思います。

⑦ デイケア部・サブチーフ・坂本美由紀

今回の自国開催、より興味深く拝見しました。私が一番心に残ったのは、陸上競技で視覚障害の方と「きずな」と呼ばれる、ロープでつながるガイドランナーとのお互いの心のつながりに感動しました。日々の本当に辛い練習の中で共に高めあいながら、スタートからゴールまで常に同調し、走り切り、ロープの少しのゆるみで相手の体調をわかる程の信頼関係を築き、お互いを思いあう、その気持ちに心を打たれました。どの競技も出場に至るまでには、たくさんの辛さ、大変さがあつただろうに、ハンデを思わせない力強さ、前向きな気持ち、ひたむきに頑張る姿、そして周りの人への感謝の気持ちを述べながら流す涙に本当に感動しました。輝ける場所や可能性を自分たちの力で広げ、キラキラの笑顔でインタビューを受けている姿にも感動しました。

⑧ デイケア部・生活支援員・史興宝

パラリンピックで感じたことは沢山ありましたが、その中で最も印象に残ったのは木村敬一選手です。四大会連続で出場したパラリンピックで初めての金メ

ダルをつかみ取った木村選手は、表彰台で君が代が流れた瞬間涙を止めることができませんでした。木村選手は「僕は表彰台に上がってメダルを頂いてもそれが何色か見えない。国歌を聞いたときに自分が金メダリスト、世界チャンピオンになれたんだと感じることができた」とおっしゃっていました。パラリンピックはオリンピックと違って国籍も性別ももちろん、障害も年齢も様々です。パラリンピックは沢山の方に夢を与えてくれたと感じました。

⑨ 相談支援事業所・相談支援専門員・守田直人

パラリンピックについては、障害者に対して、いまだ「かわいそう」だとか「被保護の存在」というイメージをもたれている層にこそ見て欲しいものでした。人間の持つ可能性のすごみや、超人的な動きが与えるインパクトは大きいと思います。私が先日通院した際、待合室でパラの競泳の映像に、十代の男の子が、「こんな速く泳げるの!？」と驚いている様子が印象的でした。競技の面白さをもっと広がり、メディアでの取り扱いも大きくなるといいなと感じました。特に印象に残ったのは、視覚障害のマラソン金メダリストの道下選手の姿とガイドランナーの存在です。選手の状態を見ながら、共に戦略を立てて、本人の最高のパフォーマンスを引き出す技術は素晴らしく、強い信頼関係が根底にあると感じました。その伴走者としての姿勢に、理想の支援者像を見たように感じました。実況解説の紹介で、各々の受傷の背景も紹介され、戦争や事故、生まれつき等々様々でした。一時は絶望したかもしれない選手たちには、リスクを共に考え、チャレンジに向かった周囲の支援者の存在があつたと思います。私も可能性を引き出せる支援者でありたいと感じました。

⑩ 食生活課・栄養士・村上和美

トライアスロンで銀メダルを獲得された宇田秀生さんのテレビでの紹介がとても印象に残りました。結

婚からわずか五日後に、就業中の事故で機械に巻き込まれ右腕を失ったという話でした。これからの人生で一体何度「できない」が待ち受けているかと不安になる夫を、「なんとかなるよ、二人一緒だから」と支える妻の言葉、夫婦の絆に感銘を受けました。どん底から次への目標に向かおうとする自身のメンタルの強さ、そしてそれを支え応援してくれる家族や仲間。人間は一人では生きていけない、支えてくれる人の存在は人生においてとても重要だと感じます。パラリンピックはオリンピックの選手とは、また違った苦悩や、壁を乗り越え、努力を重ねてこられた方々だと思います。そして、その分選手を支えてきた人との信頼関係や絆は私の想像するよりも深く、とても一人で成し得ない結果なのだと思います。

⑪ 食生活課・調理員・後藤紗也加

東京パラを観て一番印象に残ったのは、女子自転車ロードレースの杉浦佳子選手。五〇才で二冠達成、すごいです。ご本人の『最年少の記録は伸ばせないけど、最年長記録は伸ばせる』の言葉が力強く感じました。スポーツに年齢は関係なく、本人の諦めない気持ちが大さだと思いました。インタビューの時も、表情がイキイキして年齢を感じさせず、すごかったです。私も仕事や育児で気持ちが落ち込んだりしますが、目の前のことをしっかり受け止め、諦めずに色々なことに取り組もうと思いました。

あともう一人がカヌーの瀬立モニカ選手です。母のキヌ子さんがモニカ選手を救った言葉が、「笑顔は副作用のない薬」だそうです。高校生の時に大けがを負い、車椅子生活に。母親に言われた言葉を胸に生活していると自分の気持ちにも変化が出てきたそうです。私もとても良い言葉だなあと感じました。周りの人に笑顔で接することを心掛けて生活していきたいと思っています。



新しい仲間

入居者

日永 敏子

七月十二日に入所した日永敏子です。

隣町の出身で小・中学校は松橋の養護学校で寄宿舎生活でした。卒業後は実家に帰り両親との生活でした。その間玉名の通所に通っていました。

父も亡くなり母も高齢となり、この度 愛隣館にお世話になる事になりました。早いもので入所して四ヶ月が過ぎ少しずつ愛隣館での生活にも慣れてきたところです。職員の方さんにはいつも優しく声をかけて頂き寂しさも薄らいで来ています。でも時々家に帰りたいです。

これからも皆さんの優しさに包まれ愛隣館での生活を楽しくて行きたいです。よろしくお願ひします。

(代筆妹:日永光子)

新人職員紹介



ケア課

坂本 瀬里奈

七月四日から愛隣館のケア課で、お世話になって

います坂本瀬里奈と申します。

初めての職場でわからない事がたくさんありますが、皆さんに教えて頂きながら一生懸命に頑張っていますので皆さんよろしくお願ひします。

令和三年度俳句・短歌入選作品

短歌「月の部」

一席 お兄ちゃん 自転車(ちやり)のうしろで
見た月は 今も変わらず 輝いているね

高木 雅夫

二席 日の本の 平和を月に 祈りつつ
秋の夜空を 眺めて過ぐす

富田 正美

三席 夢ならば さめてほしいと 願いつつ
夜空に祈る 母の回復

米崎 みどり

短歌「雑詠の部」

一席 無念なり 閉校決まる 我が三岳小(ぼこう)
響く木霊(こだま)に あの日を思う

友枝 正海

二席 値上げにて 一本いくらに なるのやら
好きなたばこは セブンスター

中村 昭三

三席 読書の秋 ステイホームで 二回目の
漱石・太宰 清張・三島

友枝 正海

俳句「月の部」

一席 満月に コロナ退散 手を合わせ

岩下 力

二席 真夜中に トンネルぬけて 迫る孤月

徳丸 春美

三席 廁(かわや)から 残月見つつ 息をはく

野瀬 正義

俳句「雑詠の部」

一席 ふる里の 棚田に咲くや 曼珠沙華

福島 好美

二席 道のすみ みんなをいやすよ ひまわりよ

吉本 やす代

三席 てのひらを ベッドで合わせる

初盆か 桂豚丸(猪股敦)

三浦牧子名誉理事長賞

メダル見て かじるおじさん 罪と罰

大當 由奇子

笑える 友と別れて すごく日々

福原 隆博

帰り道 マスク外して 深呼吸

河村 智美

負けんばい コロナ感染 世間体

中村 京子

夢ならば さめてほしいと 願いつつ

米崎 みどり

夜空に祈る 母の回復

東京の 空にかがやく 「金」の月

桂豚丸(猪股敦)

理事長賞

お月さん 私の名にも 月がある

上月 史子

夢ならば さめてほしいと 願いつつ
夜空に祈る 母の回復

米崎 みどり

ありがとう 私の一部 車椅子

吉本 やす代

在宅で 歌の練習 ビートルズ
コロナ禍開けたら 歌いまくるぞ

友枝 正海

蝉の声 あせ道走って 川遊び
寝蚊帳(かや)に蚊取り 夏の思い出

米崎 みどり

ガラス越し そこに居るのに 触れられず
思いの丈を 言葉にのせて

田中 裕一

パラリンを 見つめる瞳に 涙あり
熱き闘志と 鋼の身体

桂 豚丸(猪股 敦)

愛隣荘賞

満月に コロナ退散 手を合わせ

岩下 カ

朝の虹 わくわくうれしい いい日です

吉本 やす代

夢ならば さめてほしいと 願いつつ
夜空に祈る 母の回復

米崎 みどり

霜の朝 寒さに耐えて 凜として
咲いて清らか 水仙の花

池田 良子

美味かった なんでん好きよの 一言に
スタッフたちも 満面の笑み

池田 正治

城北高等学校 竹原校長賞
ほそめて 歩く二人に 月がにっこりと

吉本 やす代

秋深く すずきも脇から ささやいて
この夜長を色添えに 互いの魅力へ 月も添え

早野 恵美

アルプリュットパートナーズ熊本 西島会長賞
ガラス越し そこに居るのに 触れられず
思いの丈を 言葉にのせて

田中 裕一

**熊本日日新聞社 編集局
デジタル編集部 岩下部長賞**

ガラス越し そこに居るのに 触れられず
思いの丈を 言葉にのせて

田中 裕一

避難所で 雨音耳に 眠りつく

渡辺 タキ子

第三者委員 栗川賞

無念なり 問校決まる 我が三岳小(ぼこつ)
響く木霊(こだま)に あの日进行

友枝 正海

晴れた朝 里芋の葉に ついでいる
朝露の珠 心豊かに

池田 良子

第三者委員 山西賞

夏雲を 孫とみつめて ものがたり

中村 京子

オフィス幸知 平野賞

満月に コロナ退散 手を合わせ

岩下 カ

夏雲を 孫とみつめて ものがたり

中村 京子

天国の 母とまったり 会話する
ZOOMなくとも 通じる幸せ

坂田 照美

三菱総合研究所 高森賞
帰り道 マスク外して 深呼吸

河村 智美

ガラス越し そこに居るのに 触れられず
思いの丈を 言葉にのせて

田中 裕一

山鹿燈心会 会長賞

厠(かわや)から 残月見つつ 息をはく
父おんぶ 母待つ家路 月明り

野瀬 正義

吉里 昭子

避難所で 雨音耳に 眠りつく

渡辺 タキ子

16時30分 感染確認 日常化

中村 武光

★ 山本葉奈さん地域生活へ ★

昨年の九月に入所されていた山本葉奈さんは、社会福祉士になるという目標を実現すべく、熊本学園大学社会福祉学部を受験。合格後、今年九月より同大学通学のため熊本市内に生活の場を移されています。

〳〳山本さんよりお便りをいただきました。〳〳

【全文】

秋分の日を終えたのにもかかわらずまだまだ残暑が厳しいですが、職員さんをはじめとする皆さんいかがお過ごしでしょうか？

皆さんに涙涙のお別れの挨拶をし、愛隣館を去って一ヶ月が経とうとしています。こちらの生活にはまだまだ慣れず、職員さんとの関わり方を日々学習しているところです。施設とは違って、呼吸器をつけた方や、小児の方のシヨートステイで毎日が違って混乱しているところです。学校も始まり、まだまだコロナで遠隔授業が多いですが、福祉の力を借りて福祉タクシーを利用して学校まで通学する日もあります。

毎日不安に押しつぶされそうな日が続いています



愛隣館玄関前：大勢の入居者・職員に見送られる中、旅立ちの挨拶をされる山本葉奈さん

すが、一歩一歩進んで行けたらいいなと感じているところです。コロナが落ち着いたらまた遊びに行きたいと思います。

皆様におきましてもお体にお気をつけてお過ごしください。

令和三年九月二十八日

葉奈

奉納山鹿灯籠寄贈

大宮神社（杉谷博康宮司）より、「山鹿灯籠」を感染予防の上で外出機会が少なくなった市内十か所の福祉施設入居者に、祭りの気分を味わってもらいたいとの趣旨から二十一基の灯籠が寄贈されることになりました。その中から二基の灯籠を愛隣館にもいただきました。

山鹿灯籠は灯籠師が和紙と糊だけで作る国指定伝統的工芸品。まつりの神事「上がり灯籠」で奉納されるものです。戴いた灯籠は東京大神宮を再現したもので、食堂内のどこからでも見えるようステーション左前方にスタッフが作成し、アクリルケースに保管展示しています。

灯籠の前では足を止めている人の姿も見受けられ、日常を忘れる一瞬を過ごさせていただいています。



ケースに収まり明かりが灯った山鹿灯籠

三十年永年勤続表彰



永年勤続者 代表

ケア課 川上むつ子

私が愛隣館に入職いたしましたのは平成三年四月。入居棟が七十床への増設と、デイサービスセンターの開設時でした。「口の如く、汝の隣を愛すべし」の理念に基づき入居者に寄り添った介護に徹してきましたつもりです。

この三十年という月日の中でたくさん入居者と出会いと別れがありました。そして、たくさん笑顔に助けられて頑張ってきました。が、入居者の方との別れは、介護者にとってこれほど悲しい事はありませんでした。

当時と比べ介護方法も大きく変わり、現在ではリフターやハグなどを使つての移乗介助になり介護者の負担が軽減されるようになりました。また、職員間ではインカムでの連絡、連携を図り仕事が進みますようにになりました。

私がこの仕事を続けてこられたのは、施設長を始め、先輩・同僚・後輩のお力添えがあったからです。

これからも微力ながら、頑張りたいと思いますのでどうぞよろしくお願い致します。

最後に私事ですが、義理の母が愛隣の家にお世話になっております。本当に感謝しております。この度は永年勤続表彰を賜りありがとうございます。